祇園南海の「遊灘渡」詩と「鉛山紀行」及び菊池西皐の『三山紀略』について
—塔島の三窓をめぐって—

久保卓哉

紀州藩の儒官で漢詩人、南画家である祇園南海の「遊灘渡」詩と、紀行文「鉛山紀行」は、現在も景勝地である白浜の江戸時代における自然景観をありのままに伝える。本論では主として詩を分析しながら、その中から見えてくる文献上の問題を検討してゆく。

［キーワード］　祇園南海　鉛山紀行　菊池西皐　三山紀略　瀬戸古事　自然景観の変化　紀伊　白浜

はじめに

祇園南海に紀行文「鉛山紀行」がある。南海が五十八歳の享保十八年に長子の濂、岡柳橋とともに和歌山から船で鉛山温泉（白浜町湯崎）を訪れ、風光明媚な白良浜や千畳敷、三段壁、平草原などの名所に遊んだ十日間のことを記したものである（原漢文）。この紀行文は南海の門人である田中履道（名は由恭、紀伊の人）が輯録した『南海先生文集』巻之五に収められている。[1]

そこには、地元の医師原春庵に請われて、鉛山の七景を詩題にした詩を賦して贈ったことが記されている。この時の詩、「鉛山七境詩」七首はよく知られているが、これ以外に七言律詩「遊灘渡」一首がある。以下に詩と紀行文の内容を対比しながら、「遊灘渡」詩に表れた自然と現在の景観との相違を明らかにしてゆく。

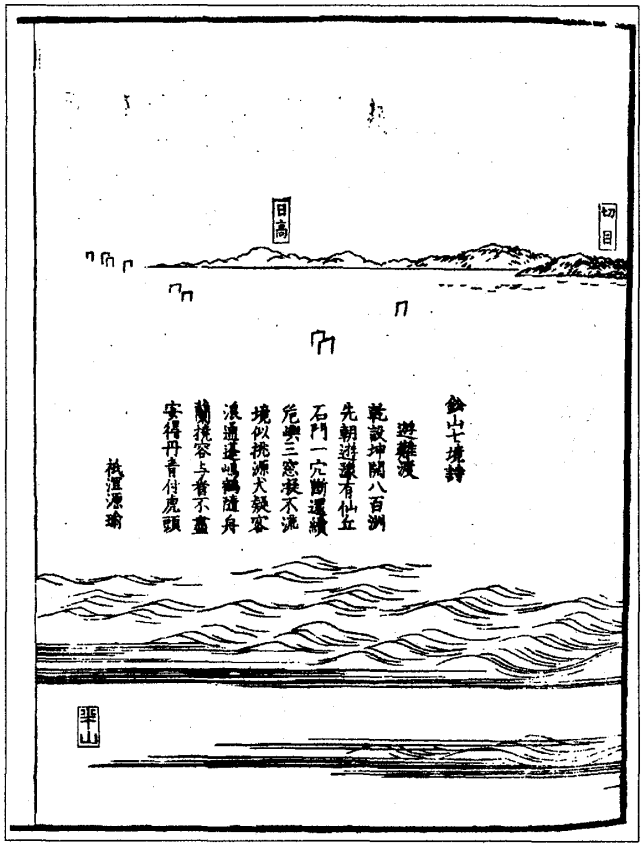
一　祇園南海「遊灘渡」

詩の題である「遊灘渡」は「灘渡（せと）に遊ぶ」と読む。今

の白浜町瀬戸に遊んだ時のことを歌ったものである。

この詩は、門人田中履道の『南海先生文集』（天明四年（一七八四）三月刊）に輯録されておらず、手もとの資料では、『西國三十三所名所圖會』（鶏鳴舎曉鐘成編輯、松川半山・浦川公左畫圖、嘉永六年（一八五三）三月刊）と、『熊野雑誌』（目良碧斎編輯兼出版、明治廿一年（一八八八）三月三日刊）、及び、『南海先生後集』[2]（多紀仁之助編、和中金助發行、昭和三年（一九二八）四月廿五日發行）に輯録されている。

郷土史の総集である『白浜町誌　資料編』（一九八〇年刊）やこれに先行する郷土史家雑賀貞次郎著『南紀雑筆　椿の葉卷』（昭和十三年五月十九日、紀南の温泉社刊）などは、この詩の出典として『西國三十三所名所圖會』と『南海先生後集』を用いず、目良碧斎の『熊野雑誌』を用いている。その理由を考えるに、『西國三十三所名所圖會』の場合は、本来は「鉛山七境詩」七首のうちの一首ではないはずの「遊灘渡」を、「鉛山七境詩」としてあげているからであろう（図一参照）。また『南海先生後集』の場合は、詩の題が「遊灘渡」ではなく「遊鉛山温泉二首」という題で二首あるうちの一首として輯録されており、しかも詩の文字に幾つかの異同があり、その異同がある文字が詩として妥当なものではないからであろう（図二参照）。それに比べて『熊野雑誌』の場合は、詩題の下に祇園南海自身による奥書が記されており、詩の背景がよく分かると判断したからであろう[3]（図三参照）。拙論でも『熊野雑誌』所収の「遊灘渡」を用いることにする。



【図一】『西國三十三所名所圖會』
「遊灘渡」を「鉛山七境詩」の一首としてあげている

遊鉛山温泉二首

鉛山之浦何蟠蜒。至實精華不レ後レ天。自レ古青州俱絲
石。于今赤岸接銀川。巖々舊礦穿丹穴。歩々暖泉噴紫
烟。借問年々來浴者。何人得レ遇騎羊仙。

地設天開八百洲。先朝遊豫有仙丘。石門崔巍高逾
固。窓嶼玲瓏凝不レ流。境似桃源犬疑客。海通蓬島鶴
隨レ舟。蘭橈容與看難レ盡。安得丹青付虎頭。浦東多洲嶼。名曰八百八洲

【図二】『南海先生後集』
「遊鉛山温泉二首」のうちの一首としてあげている（左）

熊野雜誌

遊灘渡 享保八年孟夏下院木府文學 藍江瀛瑜伯玉父題并書

乾沒坤開八百洲。先朝遊豫有仙丘。石門一穴斷。還續。
唐嶼三窓凝不流。境似桃源犬疑客。浪通蓬嶋鶴隨舟。
蘭橈客與看不尽。安得丹青付虎頭。

七境詩

銀砂歩 在浦東北上有七嶺山峯只白砂弦之如銀銀山下一帶細沙如雪

一望銀沙地。海潮洗更白。秋霜長不消。夏雪亦疊尺。不
見眠鷗鳥。唯看數篆跡。

金液泉 境多湯泉各有名号銀泉府泉最精微可人

天地有洪爐。金寶揚其精。萬古石巖曲。滉々清且鳴。非

【図三】『熊野雜誌』収「遊灘渡」

二　目良碧斎編輯『熊野雑誌』所収「遊灘渡」

「渡灘渡」詩は次の通りである。

遊灘渡

享保十八年孟夏下浣本府文學祇洹源瑜伯玉父題幷書

乾没坤開八百洲
先朝遊豫有仙丘
石門一穴斷還續
唐嶼三窓凝不流
境似桃源犬疑客
浪通蓬嶋鶴隨舟
蘭橈容與看不盡
安得丹青付虎頭

灘渡に遊ぶ

享保十八年孟夏下浣、本府の文學祇洹源瑜、伯玉父、題幷びに書す

乾没し坤開く　八百洲
先朝　遊豫す　有仙の丘
石門の一穴　斷ちて還た續き
唐嶼の三窓　凝して流れず
境は桃源に似て　犬　客を疑い
浪は蓬嶋に通じ　鶴　舟に隨う
蘭橈　容與として　看るも盡きず
安くにか丹青を得て　虎頭に付まん

【校異】

各本により文字の異同がある。各本を次のように略して異同を示す。

『西國』「＝『西國三十三所名所圖會』
『熊野』＝『熊野雑誌』
『後集』＝『南海先生後集』

『熊野』　『各本』
乾没　『西國』作「乾設」、『後集』作「地設」
坤開　『後集』作「天開」
一穴　『後集』作「崔巍」
斷還續　『後集』作「高逾固」
唐嶼　『西國』作「危嶼」、『後集』作「窳嶼」
三窓　『後集』作「玲瓏」
浪通　『後集』作「海通」
不盡　『後集』作「難盡」
虎頭　『後集』には「虎頭」の下に多紀仁之助の注「浦東多洲嶼。名曰八百八洲」十一字がある

なお、『熊野雑誌』の詩題に添えられた奥書は「享保八年」とするが、祇園南海の「鉛山紀行」には「癸丑之夏四月」とあり「癸

丑」の年は「享保十八年」であるから、『熊野雑誌』の誤りであることは明らかである。また、奥書の原形を伝える『祇園南海詩書　龍門石詩巻』（太平文庫32　杉下元明解説、太平書屋蔵版、平成七年八月刊）には、祇園南海の自書として「享保十八年」と見える。また、奥書の「下浣」を、『熊野雑誌』は「下院」とするが、前書に掲載された自筆の書を見ると「下浣」であることが分かる。「下浣」は下旬のこと。

【語注】

灘渡＝灘は、水流が急な「はやせ」「せ」の意。灘渡は、セトと読み、現在の白浜町瀬戸をさす。仁井田好古編『紀伊續風土記』はセトを「迫門」とも表記したと次のように記す。「其地形、古海湾の北の端、中間南北に切れて島ありて別に迫門セトをなせり［島は即今の遠見番所及御殿跡の地なり］。海潮退きて迫門陸となり、島と一となる。人民始めて此地に村居をなしてより、迫門の名、此地の大名となり、文字を瀬戸と改む。」（巻之七十一牟婁郡三瀬戸村）

祇園南海の「鉛山紀行」にも「遊灘渡。渡在鉛山東北二里。歩踰一丘、便是沙頭。所謂七境銀沙歩是也（灘渡に遊ぶ。渡は鉛山（湯崎）の東北二里に在り。歩いて一丘を踰えれば便ち是れ沙頭。所謂七境の銀沙歩（白良浜）是れなり）」（括弧内小字注は筆者。以下同じ）とある（『南海先生文集』巻之五）

享保十八年＝一七三三年。祇園南海五十七歳。

孟夏＝旧暦四月。

下浣＝下旬。享保十八年孟夏下浣は、一七三三年四月十九日から二十九日の間。祇園南海の「鉛山紀行」に「壬申快晴遊灘渡」壬申の日に灘渡に遊んだとある。壬申の日は、四月二十一日。従ってこの詩は四月二十一日以降の日に作られたことになる。新暦では六月三日より六月十二日までの日にあたる。

本府＝幕府。

祇洹＝洹の音はオン。祇園と同じ。

源瑜＝祇園南海の字。阮瑜ともいう。

伯玉＝祇園南海の字。

父＝年輩の男。

題并書＝詩題をつけ、あわせて書きしるしたことをいう。

乾坤＝天と地。ここでは天と海をいう。

八百洲＝今の江津良、臨海、瀬戸及び田辺湾の島々をさす。祇園南海は「鉛山紀行」で「邨東曰江面、又曰畫面、又稱江津良、其前渡謂之八百八洲。（村の東を江面（えづら）、又畫面（えづら）、又江津良と稱す。その前の渡（せと）はこれを八百八洲と謂ふ）」といっている。

先朝＝先代の藩主。紀州藩初代藩主徳川頼宣のこと。徳川家康の十男、諡号は南龍公。

江戸時代の瀬戸を記した『瀬戸古事』[4]に（『白浜町誌　資料編』七四八頁は、『瀬戸古事』の成立を嘉永年間（一八四八～一八五三）とし、原本は宝永年間（一七〇四～一七一一）にはできていたとする）、「先君と有ルハ南龍院様之御事也」とある。

南龍公は幾度となく鉛山に湯治に来ている。堀内信編『南紀徳川史』（昭和五年刊）巻之四には、「寛文二年壬寅（一六六

二年）（公六十一歳）三月、浴於湯崎温泉。三月十八日頼純主御同伴にて田辺へ御湯治。六月復浴於湯崎温泉」とあり、『瀬戸古事』には、「慶安三年（一六五〇）、先君始テ瀬戸へ被爲入候。寛文二年壬寅、南龍院様瀬戸へ被爲入。同三年癸卯二月瀬戸へ被爲入。寛文五年乙巳三月瀬戸より鶏合宮へ被爲成候」とある。

祇園南海は「鉛山紀行」で「一名唐嶼、隔嶼東岸石門桓立、上有先朝別館、今已廃矣。（一名唐嶼なり。嶼（しま）の東岸を隔てて石門、桓（はしら）のごとく立つ。上に先朝の別館有りしも、今は已に廃れり）」と記している。

南龍公頼宣の御殿が瀬戸にあり、鉛山を訪れた時はここに滞在した。住民は御殿場と呼び御殿番を勤める九軒の家があったことが『瀬戸古事』に見える。以下にそれをあげる。「先君之御殿跡在り、爾今此所を御殿場といふ、夫より切り通シといふて石を切りぬきし坂有り、これを過て馬部谷トいふ有、在番之筋是より先へ行事不相成。先君之仰二寄乙九軒家と名附て、地下人九人ニ九軒家作を賜り住居せしむ、今ハニ軒計り残り、九軒の内三軒ハ御殿場二建ち、忠右衛門、七左衛門、清右衛門。馬部谷二六軒建ツ。与兵衛、七兵衛、左近右衛門、茂左衛門、源七、善兵衛。」

遊豫＝遊び楽しむ。

有仙丘＝有仙の丘。神仙が住む丘。

唐嶼＝嶼は小さい島の意。トウシマと読む。今の塔島のこと。

桃源＝桃源郷。桃源郷では花が咲き乱れ犬や鶏がのんびりと鳴き、人々は楽しそうにゆったりとしている。陶淵明「桃花源記」に、「良田美池、桑竹の屬有り。阡陌交わり通じ、雞犬相聞こゆ。其の中に往來し種作するもの、男女の衣着は、悉く外人の如く、黄髪垂髫（こうはつすいちょう）、並びに怡然として自ら樂しめり」（『箋注陶淵明集』）とあることによる。

蓬嶋＝蓬莱。神仙が住むという伝説上の山。

蘭橈＝蘭の樹でできた船の舵。

容與＝波にゆられるさま。ゆったりとしたさま。

丹青＝赤色青色の顔料。また、絵を描くこと。

虎頭＝中国の東晋時代の画家、顧愷之の幼名。顧虎頭とも称され、その「女史箴図」「洛神賦図」は名高い。唐、張彦遠撰『歴代名畫記』巻五に、「顧愷之、字は長康、小字は虎頭、晉陵無錫の人なり。才藝多く、尤も丹青に工なり。形勢を傳寫して妙絶ならざる莫し」と見える。

付＝与える。たのむ。

【押韻】

七言律詩の押韻規則の通り、偶数句末と第一句末に韻字を置いて韻をふんでいる。韻字は「洲、丘、流、舟、頭」で、いずれも平声尤韻に属する。

【現代語訳】

日が沈み大海が開けるこの八百の島々

徳川の先君もこの仙境の丘に遊んだことがあった

門のような巨石に穴が一つありその穴はとぎれてまた続いているように見え
塔島にある三つの窓は固くかたまって動かない
ここはまるで桃源郷のよう　犬も訪れた客を嗅ぎ
寄せる波は神仙が住む蓬莱とつながり　鶴が小舟について飛んでくる
ゆらゆらと揺れる舟から見る景色は見ても見尽くせないほど
どこかで絵の具を求めてこの美しい景色をあの顧愷之に描いてもらおう

祇園南海のこの詩には注目すべきことが四つある。一つは、当時の瀬戸、臨海浦の美しさが歌われていること。二つは、初代藩主徳川頼宣の御殿があったこと。三つは、塔島には三つの穴があったこと。四つは、顧愷之に託しているが、みずから描いた画が存在した可能性があることである。特に、唐嶼（塔島）の穴とそれが描かれていると思われる画の行方が注目される。

三　唐嶼三窓について

[一]「鉛山紀行」の唐嶼三窓

現在の塔島には穴がなく、大小の島が沖に向かって続いている。その島がもと有った三つの穴が崩れた名残であるとすれば、自然景観の変化という観点からも興味深い。

祇園南海は「鉛山紀行」の中でも「三洞玲瓏たり」と三つの洞穴があったことを記している。

壬申（旧暦四月二十一日）、快晴、灘渡に遊ぶ。鉛山の東北二里に在り。歩きて一丘を踰ゆれば、便ち是れ沙頭。所謂七境の銀沙歩（白良浜）是なり。之を過ぐること百餘歩にして、平山斗起して、茂林蔚然たり。中に神祠有り（熊野三所神社）。北へ一里すれば又一山を得（番所山）。上に斥候樓有りて、下に雙巖並跱する有り。巖は原一趾なるに、中間は嵌空（ほら穴）にして斷たんと欲す（円月島）。回りて北するに牕嶼■兀たるあり。三洞玲瓏として、宛も牕牖（まど）の如し。一名、唐嶼なり。嶼の東岸を隔てて石門、桓のごとく立つ。上に先朝の別館有りしも、今は已に廢れり。而れども民は尚ほ相戒め、敢て船を繫がず。灘波の村落は、耕漁相半ばなり。（原漢文）

これを現代語になおすと次のようになろう。

（享保十八年）四月二十一日（新暦六月三日）快晴。瀬戸に遊ぶ。湯崎の東北二里に在る。湯崎から歩いて一つの丘を越えれば、砂浜が広がる。いわゆる七境の一つの白良浜である。そこから百歩余り歩くと、平たい山があり、そこは樹木が鬱蒼と茂っている。中に神を祭ったお堂がある（熊野三所神社）。そこを過ぎて北に一里行くと、また山がある（番所山）。山の上に御番所の建物があり、その下に二つの巖が並んでいるのがある。巖はもとは一つのものだったが、まん中が

空洞になって切り立っている（円月島）。そこを回って北に行くとやや高い窓島がある。三つの穴が透き通るように美しく、まるで窓のようである。一名を唐嶼という。この唐嶼の東岸の向こうに石門があり、柱のように立っている。その上には南龍公の別館があったが、今は無い。だが住民は今もなお慎み、ここに船を繋ぐことはない。瀬戸の村落は農業と漁業があい半ばしている。

これを見ると塔島は、あたかも窓が空いているように見える三つの空洞を持った島であったことが分かる。

［二］菊池西皐『三山紀略』の唐嶼三牕

これを裏付けるように、菊池西皐の紀行文『三山紀略』[5]にも、唐嶼に「三牕」（三窓）があることが記されている。『三山紀略』は、祇園南海の「鉛山紀行」から六十九年後の享和二年に書かれたもので、菊池西皐が、享和二年（一八〇二）四月二十八日から六月九日まで（新暦五月二十九日～七月八日）、紀州府を出発して熊野三山を巡った時の紀行文である。「鉛山」と題した章に「灘渡」のことが記されている。

次の日、難渡に遊ぶ。右岸自り下、亂石の間を歩き、左のかた百武（武は、半歩。約三尺）許りを顧みれば、一巨巖の屹立したるあり。中は空にして洞の如し（円月島）。右のかた松林に入り、小阜を踰ゆれば、廓然として一境 内彎に對す。小嶼（小島）數四ありて、其の中に突出し、爭ひて奇勝を獻ず。

白日已に西すれば、微かな風も揺れず、穀のごとき波自ずから文をなす。岸を隔てし諸山、蒼翠倚畳たりて、皆煙波夕陽の間に倒景す。東北のかた田邊城を一帯松汀の外に見ゆ。左のかた岸に循ひて行けば、巨石 門を爲すあり。高さは五丈許り、横は之に稱ふ（つり合う）。其の左は丘に連なり、右の礎は海に没す。既に門に入るに、數歩にて又一門を得。大なること前の如し。出づれば則ち波上に奇巖あり。唐嶼と名づく。垣の如く屏の如く、三牕（まど）有り。布帆の其の外を過れば、宛然として（まるで）窓櫺（連子まど）中の物なり。其の巨たること知る可き也。

日已に崦嵫（日の入る所の山）に下れば乃ち帰る。路 七鉱の山の下を過ぎれば、白沙 雪の如きあり。歩歩（一あし一あしずつ）すれば人を迷はしむ。各おの其の沙を掬ひて、旅寓に還る。旅寓の主人は和佐氏、名は長なり。南海祇先生の七境詩の巻を視る。詩は奇抜にして、書も亦た遒勁なり。余曰く、「鉛山七境之目は、昔自り之有るか。意者先生之を創る也」と。其の山を丹雘（色をつける）し、其の林を錦繡（美しくする）するは、文人之遊にして、往往皆然り。巻尾に、「享保十八年孟夏下浣」と云へば、今を去ること已に五十有餘年なり。其の樂しみは則ち同じなれども、及ぶ可からざる者文のみ。廼ち得る所の詩二首を書して之に與ふ。謂ふ所の七境者、銀砂歩、金液泉、芝雲石、龍口巖、平草原、藥王林、行宮址、是れ也。相ひ傳ふるに齊明帝より以下數

帝、嘗て此に浴すと。宮址は尚ほ存す焉。

蓋し（まさしく）灘渡は巧麗を以て顯れ（知られる）、千疊巖は奇雄を以て勝れり。未だ優劣を判ずる能はず。此の遊 余等 意を得ること甚だし。獨り良夫（同行者兼良夫）家書を得て故を告げ、手を分かちて歸れり。風景も亦之が爲に索然たり。（原漢文）

菊池西皐は現在の臨海浦の海岸を徒歩であるいて唐嶼に出たようである。その情景を現代語に直して再現してみよう。

「東北の方角、浜の松林の上に田辺城が見える。左へ岸に沿って行くと門のような巨石がある。高さは十五㍍余りで、横も同じくらい。その左は丘につながり、右は海に没している。その巨石の門をくぐって数歩行くとまたもう一つの門がある。大きさは前の門と同じくらいである。そこをくぐると波間に奇巖が見える。唐嶼という島で、垣根か塀のように立ち、三つの窓がある。帆掛け船が外側を通過すると、まるで連子窓の中にあるように見える。窓がいかに大きいか分かるであろう」

菊池西皐が見た唐嶼は、帆掛け船が欠けずに見えるくらい大きな窓が三つあいていたようである。

[三] 『瀬戸古事』の唐嶼二穴

更にまた、これを裏付けるように『瀬戸古事』にも同様の記録がある。

とう島　但しうしの鼻ともいふ、唐島の北の方なり、二ツ巖に穴有、但し此頃右之穴一ツかけたり、今ハ穴一ツなり

とう島の北（沖側）にあった「うしの鼻」という島には、巖に二つの穴が空いていたが、右の穴が一つ欠けて、穴が一つになったという。この二つの穴が、祇園南海が「遊灘渡」詩と「鉛山紀行」で表現した、「唐嶼三窓凝不流」と「三洞玲瓏、宛如牕牖」の三つの穴と、菊池西皐が『三山紀略』で記した「有三牕」の三つの窓と同じものである可能性は高い。極めて美しくかつ珍しい天下の奇観であったことは容易に想像がつく。

[四] 丹青虎頭

祇園南海が唐嶼を描いた画が残っていれば、そこには三窓を持った島が描かれている筈である。「どこかで絵の具を求めてこの美しい景色をあの顧愷之に描いてもらおう」と詩に詠んだが、顧愷之を持ち出したのは自分の画才に対する謙辞で、自ら絵筆を執ったに違いない。そう考えてもよいと思われる記述が一日前のことを記した「鉛山紀行」にある。

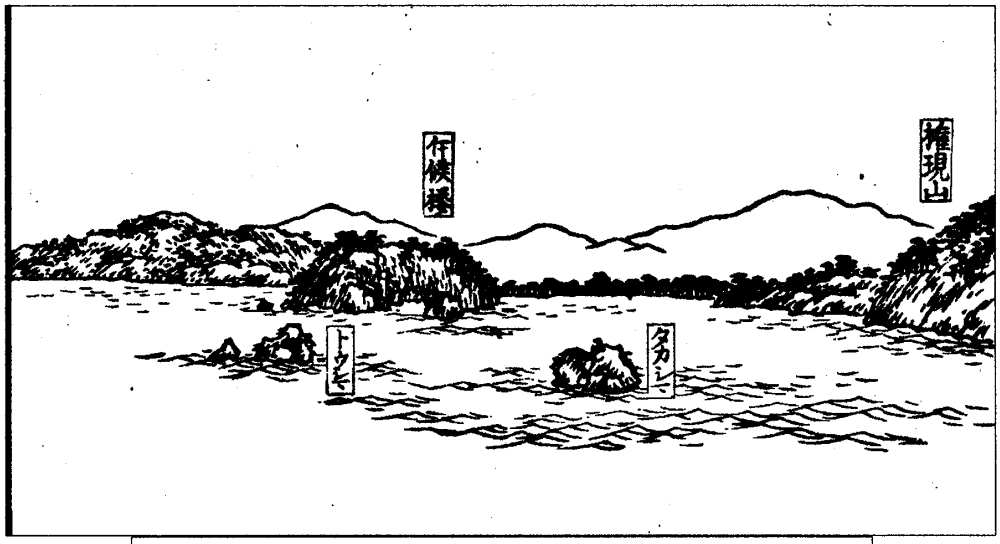
庚午（四月十九日）、宿雨初めて晴る。途未だ乾かざれば、客皆簾を下して几に隠れて眠る。山中の醫、春庵原氏來たりて詩を呈す。原氏は本北越の人なり。壯歳にして詩を善くし此に隠る。家に史書多く、客に假觀を放にせしむ。之とともに坐して語れば、頗る雅趣有り。翌日（四月二十日）原氏及び館人復たび來たり。筆と硯を具して、以て書畫を請ふ。乃ち七境の題目を擇びて、各おの係ぐに詩を以てす。書し

て以て貽(おく)り、併せて鉛山の圖二幅を製(つく)る。一向一背なり。惜しいかな拙技、山容水態に於いて僅かに其の梗概を記せしのみ。夫の風波烟雲、出没變幻之妙に至りては、荊關董李之神手を得るに非ざるに自り、未だ盡呈して詳寫する能はざる也。（原漢文）

筆と硯を持って訪ねて来た医師原春庵の求めに応じて、「七境詩」七首を作り、「鉛山の図」二幅を描いて贈ったという。そして、自らの拙技では、風波烟雲、出没変幻の妙を描ききれなかったと謙遜している。これは灘渡に遊ぶ前日のことで、梅雨もようの雨が上がり、青空が広がる快晴の日に灘渡を訪れた南海は、紺碧の海と三窓の唐嶼の美しさに息をのんだはずである。そして顧愷之に託してでも、この景色を残しておきたいと思ったはずである。その画が今残っていないことが残念でならない。

［五］『西國三十三所名所圖會』のトウシマ一穴

『西國三十三所名所圖會』には松川半山の画で、祇園南海の「鉛山紀行」に登場する景色が刷られている（図四参照）。トウシマと斥候樓（現在の番所山）がそれで、唐嶼には穴が一つ空いている。その横の巖はもう一つの穴が欠けた跡であろう。



【図四】『西國三十三所名所圖會』松川半山画
「トウシマ」には一つの穴があり、左横にはもう一つの穴が欠けたと思われる巖が描かれている

これを現在の塔島と比べてみると（図五参照）その自然景観の変化がよく分かる。現在では穴がなく、崩れ残った巖が沖に連なっている。左の小さい巖とまん中の大きな巖の間に、低くなった巖が海上に出ているのは、その名残りであろう。ここには嘗て三つの穴があり、透き通るように向こうが見えたと考えられる。

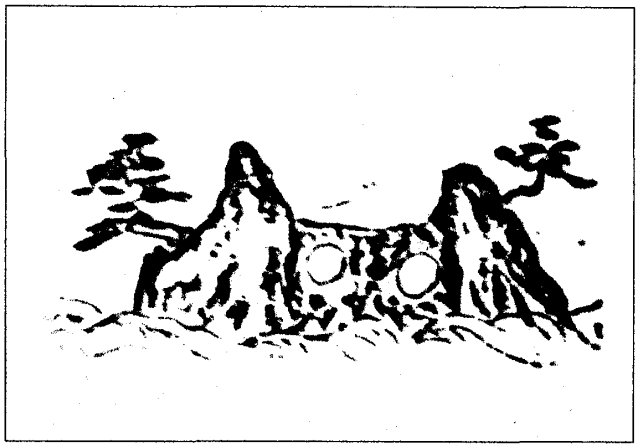
【図五】現在の塔島
左の巖と中央の巖の間に低くなった巖が連なる
右は斥候樓があった番所山（写真：筆者）

[六]『白浜町誌』の塔島の穴

『白浜町誌』本篇下巻一（白浜町誌編纂委員会編纂、昭和五十九年二月一日発行、第二八八頁）は塔島の穴について、祇園南海の「鉛山紀行」を「上に斥候樓有り、下双岩並跱、岩原一趾、中間嵌空、断回を欲し、西北牕嶼兀、三洞玲瓏、宛ら牕牖の如し、一名唐嶼」と訓じ、菊池西皐の『三山紀略』を「出づれば、則ち波上奇巖、名唐嶼、垣の如く屏の如し、三牕有り、布帆其の外を過ぐれば、宛然窓櫺中物、其の巨知るべき也」と訓じて、「この二文から見るとこのころのとう島は、岩が垣か屏のようになっていて、穴が三つあると書かれている。三つの穴は、とう島にあいていたのが二つと、一つは臨海浦浜西北隅の岩穴がそれであろうと推測される」と、祇園南海と菊池西皐が記した唐嶼三窓を採用していない。塔島の穴は二つで、祇園南海と菊池西皐が三つと見たもう一つの穴は臨海浦浜西北隅の岩穴であろうと推測し、その根拠に、国香軒蘭秀著の「温泉の日記」と『西國三十三所名所圖會』を挙げている。

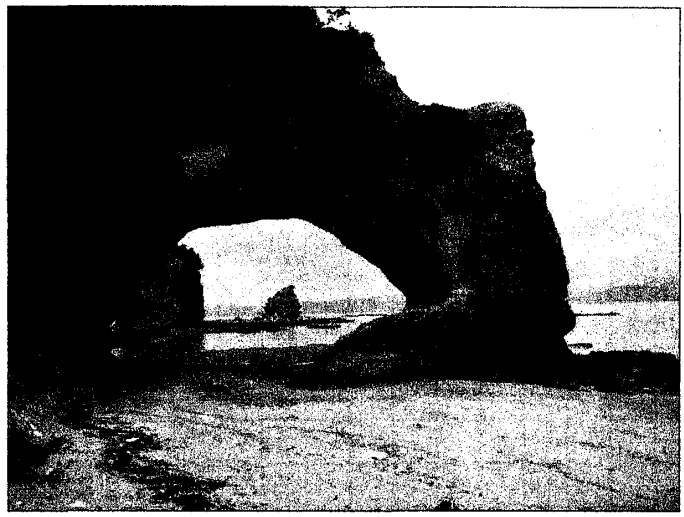
私は天保五年に書かれたという国香軒蘭秀の「温泉の日記」については未見だが、『白浜町誌』は「温泉の日記」の文「目鑑岩。瀬戸の浦より高島、遠見台を過ぐ、絵のごとくなる島中目鑑のごとく、田辺、綱しらずへ入海の口にあり。帰る帆のくれの目当やめがね岩」と、挿絵（図六参照）を引用し、塔島は「この挿絵にあるように穴が二つあった目鑑（めがね）のような島であったことが示されて

いる」と記し、『西國三十三所名所圖會』については、「「西国三十三所名所図会」には「眼鏡岩（めがねいは）　瀬戸の沖にあり、岩の正中（ただなか）に穴有り、昔は両穴ありし岩も有りしかども、今は崩れてなしといふ」と出ている」と記して、塔島の穴は二つであったことを示す根拠としている。



【図六】国香軒蘭秀「温泉の日記」の挿絵「目鑑岩」
（『白浜町誌』より）

『白浜町誌』が記すもう一つの穴の臨海浦浜西北隅の岩穴は、下の図七のことであろう。岩穴の向こうに塔島が見えている。だが、この岩穴を唐嶼三窓の一つとするには無理がある。祇園南海は「遊灘渡」詩で、「石門一穴斷還續　唐嶼三窓凝不流」（石門の一穴断ちて還（ま）た續き　唐嶼（とうしま）の三窓凝（ぎょう）して流れず）と詠み、石門の一穴と唐嶼の三窓とを別のものとしているからである。



【図七】臨海浦浜西北隅にある「石門一穴」
岩穴の向こうは塔島（写真：筆者）

また菊池西皐の『三山紀略』も前掲のように、門のような巨石と唐嶼の三窓とを別のものとしているからである。

従って、塔島にはもともと大きな三つの窓が空いていたと考えるのが自然な解釈であろう。そのうちの一つが崩れて二窓になり、やがてさらに一つが崩れて一窓になり、遂にはそれも崩れて巌石だけが波上に残る現在の姿になった。そう考えると諸文献の解釈に無理が生じない。

だがこの解釈を裏付けるためには、もう一つの調査を必要とする。それは菊池西皐が海岸を歩いて、「巨石門を為す」のに出合い、門をくぐると又「一門」があり、その門を出ると三窓を有した塔島が見えたと記した『三山紀略』を実際に調査検証することである。その調査の結果は稿を改めて発表する予定である。

おわりに

祇園南海の「遊灘渡」に接しその内容に興味を抱いてから一年が経つ。その間に多くの人から様々なことを教えていただいた。白浜在住の郷土史家鈴木喜徳郎氏は、白浜町助役と町長を務めた経歴を持つ郷土史家宮崎伊佐朗（故人）から史料を受け継ぎ、その史料をもとに、氏が主宰するサーバーのウエブ上に鉛山（白浜温泉）に関する一大サイトを展開しておられる。氏からは、瀬戸、湯崎、臨海、古道、白良浜などに関する、江戸から現在に至る歴史と文献について教わった。田辺のあおい書店の店主である多屋朋三氏は、目良碧斎の子孫にあたり、店の二階は古文書館と見まがうほど多くの史料で埋まっている。目良碧斎に関する史料や、江戸の書肆須原屋茂兵衛（湯浅出身）に関する史料を始めとして、解説を受けながら目にすることができた史料は、ここに書ききれないほど多くある。祇園南海の自筆詩巻の影印本と、菊池西皐の『三山紀略』も氏の提供によるものである。田辺と白浜の中間に位置する和歌山県立紀南図書館では、目良碧斎『熊野雑誌』の原本を目にすることができた。また、白浜町立図書館では、郷土史家雑賀貞次郎の昭和初期の著作物や、簡易製本ながら貴重な所蔵文献の数々の閲覧と撮影及び出典調査に関して、便宜をはかっていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

（1）『南海先生文集』は、『詩集日本漢詩』第一巻（富士川英郎、松下忠、佐野正巳編、汲古書院、昭和六十二年二月）による。松下忠の解題に写しだされた天明四年版の奥附に、書肆として「江戸日本橋　須原茂兵衛」の名が見えるが、須原茂兵衛は紀伊湯浅の出である。

（2）『南海先生後集』は、祇園南海の自筆の詩稿を所蔵していた和歌浦町、和中金助が、『南海先生文集』に輯録されていないものを採録して昭和三年に印刷、発行したもの。非売品。見返しに和中金助の出版趣旨文があり、続く頁に狩野直喜の題字と、鈴木虎雄の序文がある。

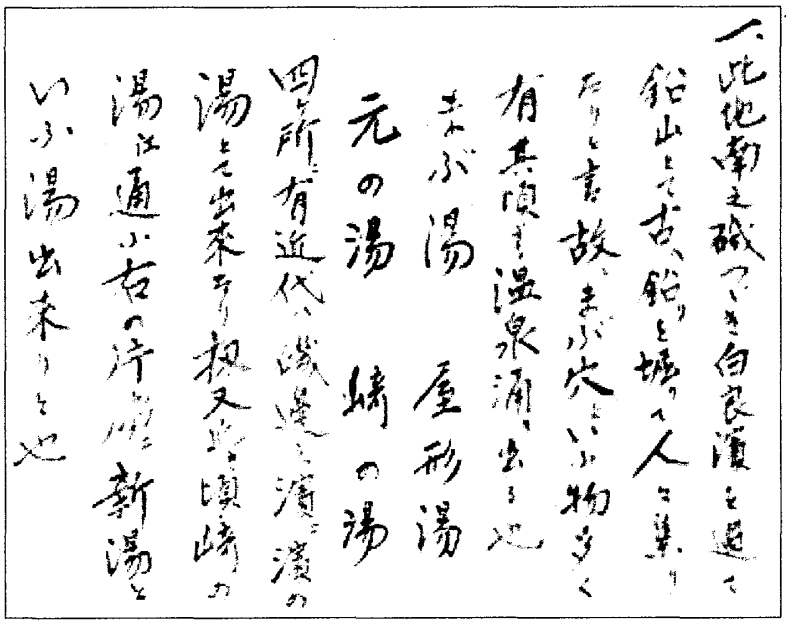
和中金助の文には、「南海先生自筆の詩稿を所蔵致居候處敢て之を私せず聊か學界に裨補する所あらんかとも存じ今回我師に請ひ曩に田中履道の編輯に係る南海先生集に載せざる所のものを採録致し南海先生後集と名け印刷に附して座右に奉呈致候　…（略）…　昭和三年六月　和中金助」とある。鈴木虎雄の序には、「紀州人和中金助藏する祇園南海詩稿あり。多紀君艸山仁之助、之を田中履道編する所の文集と較ぶるに、詩二百四十餘首多し。金助其の多くの者散逸するを恐れ、艸山に屬して拾出せしめ附刊す。

題して後集と曰ふ。…（略）…　昭和三年歳次戊辰二月
越後　鈴木虎雄撰」（原漢文）とある。

（3）祇園南海の自筆詩巻を、目良碧斎が板刻に付して私家版とした木版摺りがあり、それを影印したものに、『祇園南海詩書　龍門石詩巻』（太平文庫32　杉下元明解説、太平書屋蔵版、平成七年八月刊）がある。その「鉛山七境詩」を見ると、奥書（図八参照）は「鉛山七境詩」の末尾に添えられていたものであることが分かる。同じ目良碧斎の『熊野雑誌』は、「鉛山七境詩」の前に「遊灘渡」を配し、「鉛山七境詩」の末尾にあった奥書を、「遊灘渡」の位置に移している。「遊灘渡」は「鉛山七境詩」と同時期の作であることを示すためであろう。

（4）『瀬戸古事』は貴重な文書である（図九参照）。この文書は白浜町瀬戸の雑賀家に秘蔵されていたもので、昭和十五年、戸主雑賀弥之助より当時の白浜町助役宮崎伊佐朗に提供されたことによって初めて世に出た史料である。その経緯については、宮崎伊佐朗著「郷土短信」昭和十五年十月六日付け記事に次のように見える。「当地の雑賀弥之助家から約二百年位前の古文書を発見、これによると斉明天皇当地滞在中の頓宮ありたる記載あり（瀬戸古事）天皇当地に行幸のこと日本書紀並に古事記に誌されあるも御滞在中の御事などの記載なかったも、この文書により頓宮のあった事判明。貴重な発見にして、その後引続き調査中。」この「郷土短信」は昭和五十一年十一月二十三日、著者によって、『郷土短信　白浜の戦中記録』（全三一五頁）として一冊にまとめられ発行されている。

【図八】祇園南海「鉛山七境詩」自筆詞書（目良碧斎板刻木版摺）
「享保十八年孟夏下浣　本府文學祇洹源瑜　伯玉父題并書」
落款印「源瑜之印」（陽刻）　「湘雲主人」（陰刻）



【図九】『瀬戸古事』　鈴木喜徳郎氏による
http://www.kitohan.com/jidai/shiriyo-matome/setokoji-setokozu-chimei/seto-ura-kozu-nendai/setokoji-nanau.htm

（5）菊池西皐著『三山紀略』は、思玄亭藏本による。序に、古賀精里（名は樸）の「三山紀略序」（文化六年書）、菊池衡嶽（名は禎。菊池西皐の父。衡嶽に『思玄亭遺稿』の著があることから、思玄亭藏本の思玄亭の称は菊池衡嶽に因るものと考えられる）の「三山記畧序」（文化元年識）があり、図に、諏訪鵝湖（名は維諶）の「那智瀑圖」（天保十四年畫并識）がある。また、谷文晁の「九里峽圖」（寛政八年秋九月寫于熊野舟中）と、仁井田好古の「九里峽記序」が併録され、これらの「九里峽圖」と「九里峽記序」とを併録した理由を記した菊池敬所（名は遷。菊池西皐の子）の識語がある。その識語には、

家君は日に在りて、其の九里峽記と谷文長の画とを合刻し、序を仁井田南陽に請はんことを謀りたり。序は成れども刻は未だ果せずして逝く。今の斯の卷也。文晁氏の畫を収めたりしかば、則ち昔日を感ずること無しとする能はず。因りて舊序を併録して云ふ。遷識す。

（原漢文）

とある。また卷尾には、菊池西皐の孫菊池泰定の書による、子菊池遷の識語（天保十四年、男遷謹識、孫泰定敬書）があり、父西皐の『三山紀略』を刊行した経緯が記されているが、発行者、印刷者、発行年などを記した奥附はない。

なお、早稲田大学古典籍総合データベースは、『三山記畧』に図を寄せた鵝湖を「鈴木鵝湖 1816-1870」（享年五十五歳）とするが、鵝湖は「諏訪鵝湖 1764-1848」（享年八十三歳）のことである。「那智瀑圖」の自書識語に「八十翁鵝湖」とあることによって明らかである。貴志康親著『紀州鄉土家小傳續篇』昭和九年刊に伝がある。

On *Nankai GION*'s Chinese poem "*The Travel to Seto Shirahama*" in Edo period

Takuya KUBO

In this article I annotate a Chinese poem and study on " *The Travel to Seto Shirahama*" by *Nankai Gion* in which he portrays a natural wonder with three windows in a rocky island in classical Chinese.

Keywords: Changes in scenic area, Nankai GION, Edo period, Chinese poem, A travel book written in classical Chinese